

蓋をし、蓋の一部の穴から成虫を円筒内に5頭づつ入れて、以後30分毎に円筒の底に落下反転する成虫を雌雄別に記録した。一試験単位として3本の供試材を使用したので、一試験単位として同時に3ヶの円筒を使用した。各試験毎に同一条件の対照区を設け、全期間を通じて総計88の試験区を設けた。

(2) 試験に用いた成虫の採取方法

木製の採取箱に成虫の発生が予定される被害木の樹皮を入れておき、発生した成虫を管瓶を用いて採取し、これを供試木を入れた円筒に移した。

6. 残効試験結果 (24時間経過後の結果)

- (1) BHC 1%, 3% 粉剤  
1%では約2ヶ月、3%では約3ヶ月間略完全な残効性を有していた。
- (2) キルモス、サンクリーン等の燻煙剤は撤布後15日で殆んど残効性をみとめられなかつた。
- (3) リンデン(石油剤)、ディールドリン(油剤)等は煙霧機による撤布ではBHC粉剤に対し残効性は少く本試験では信頼できる結果はでなかつた。

52. ハゼ(伊吉)の黒痘病について(予報)

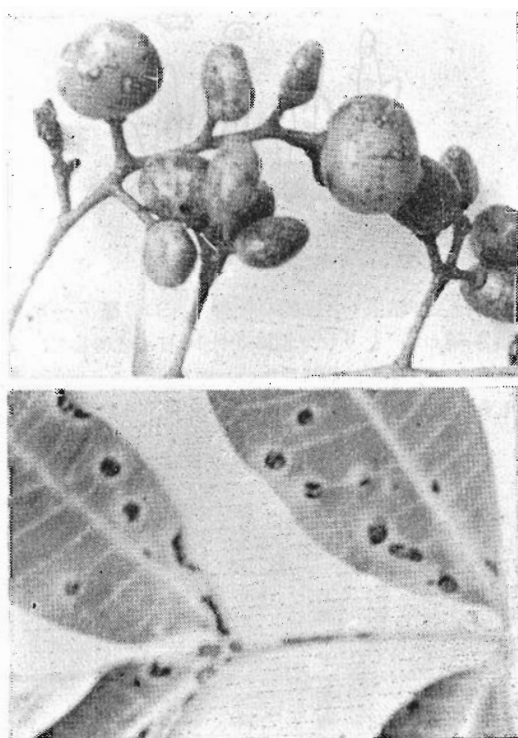
福岡県林業試験場 橋 本 平 一

我国の代表的なハゼ生産県である福岡県下において近年伊吉ハゼの葉、新梢、果実が黒褐色或いは蒼痂状の病斑に覆われ、特に果実が激害を受けて含蠟率が著しく低下する新病害が発生している。調査の結果伊吉ハゼを主に栽培している地方(5市5郡)はほとんど収穫皆無の状態である。筆者は1956年春以来本病について観察を続けてきたが、1957年5月病原菌を分離することに成功した。その結果 *Sphaceloma* 属の菌であることがわかった。従来ハゼの主要病害にはウドノコ病があるのみで、その他ウルシ科に数種の疾病が知られているが、この種の疾病についてはほとんど報告がなく、僅かに香月(1953)により、ヤマハゼ (*Rhus siluestris* Sieb et Zucc) に *Sphaceloma rhois* bi Tancourt et Jenkins が記載されているのみである。筆者は *S. rhois* の記載と本菌の形態を比較し、ヤマハゼに対する病原性についても検討した。その結果病原性を認めたが、形態に可成りの差が認められるので種名については更に充分な検討を要する。従つて現在のところ *Sphaceloma*, sp とし病名をハゼの黒痘病と呼び、ハゼの主要病害として取り上げ観察を続けている。現在までに得られた若干の結果について一応報告する。

病徴標徴及び伝染期間

最初4月下旬、5月上旬頃から新葉、萌芽葉茎、新梢に病斑が現われ、開花期である6月上旬頃より急激に病状が進展して主に幼果を侵し、7月上旬まで伝播を繰返す。その後は気温の上昇と寄主組織のクチクラ化のためか、病状の進展はほとんど認められない。

葉：病斑は散生または群生して最初褐色、表面に凸



型不定形 0.5~2.5 mm の大きさで現われる。後にこの凸型は不明瞭となり、幼葉はその中央部が灰色となつて破れる。病斑が二つ以上融合すると不規則となり、葉脈、葉縁を侵された場合には奇型を呈する。

果柄、葉柄：病斑は黒褐色、紡垂形 0.5~5 x 0.5~2 mm の大きさで現われる。

果実：最初褐色の病斑が現われ、大きさは葉上のそれに等しく、後に光沢ある黒褐色の病斑となる。病斑

が群生融合すれば凹陷した蒼痂状の病斑となり、激害果実は全体が蒼痂状を呈す。本菌の分生子堆はほとんど葉の裏面に形成され、偽柔組織の厚さは一定しないが30μ内外である。分生子梗は半透明、単条で大きさ6~36×3~4.5μ。分生子は半透明、単胞、1~2の油泡を有し、大きさ3~9×3~4.5μである。

病原性

本病原菌の病原性を確めるため、接種試験を実施した。試験に供した品種は当地方で主に栽培されている伊吉、昭和福、ブドウハゼ及びヤマハゼについても実施した。



(×1000)

分生子および分生子梗

方法及び結果：各品種の枝幹（末口直径5~8cm長さ50cm）をリング箱に3月10日に埋幹して、それにより萌芽した葉茎を用い、撤布法により無傷接種した。試験は同一方法で、6月18日、6月29日と2

第 1 表

試験区	処理		接種区			対照区
	品名	被害程度	供試葉総数	発病葉数	発病率(%)	
接種試験Ⅰ	住吉	175	140	80	0	
	昭和福	40	0	0	0	
	ブドウハゼ	53	0	0	0	
	ヤマハゼ	154	23	14.9	0	
接種試験Ⅱ	住吉	234	216	92.3	0	
	昭和福	126	0	0	0	
	ブドウハゼ	114	0	0	0	
	ヤマハゼ	132	30	22.7	0	

反復した。その結果、伊吉ハゼは10日目には顕著な病斑を現わし、自然の状態と全く一致した。ヤマハゼは幼葉な葉のみに僅かに発病した。他は全く発病しなかつた。(第1表)

被害果実と含蠟率との関係

果実が本病に侵されると含蠟率が著しく低下することは前に述べた如くであるが、果してどの程度低下するものであるか、果実集荷との経済的立場から明らかにする必要にせまられ、ソックスレット抽出装置により定量し第2表の結果を得た。

第 2 表

被害度	定量値	氣乾含蠟率(%)	絶幹含蠟率(%)	抽出蠟色	摘 要
健全		26.92	28.76	クリーム色	無液斑
軽害		15.46	16.98	褐色	1/8以下の病斑
重害		3.97	4.48	暗褐色	1/8以上の病斑
激害		1.08	1.23	暗褐色	全面病斑

試験方法：12月17日に試料を採取して45日間室内に放置後粉碎し供試した。抽出時間は10時間、抽出溶液は石油エーテルを使用した。

む す び

本菌の分類学的な検討については、さらにヤマハゼを侵す *Sphaceloma rhois* Bitancourt et Jenkins の伊吉ハゼに対する病原性を明かにした上で決定する必要がある、ここでは種名については保留する。本菌の伝染期間は4月~7月上旬までで、寄主の開花期は6月上旬であるため、果実を本病から保護するには6月上旬~7月上旬までの一ヶ月間が最も重要な時期で、この時期に薬剤撤布をすれば防除できるはずである。本病は、接種試験の結果、伊吉ハゼに激害をあたえ、昭和福、ブドウハゼは耐病性品種であることがわかつた。この結果は自然状態におけるそれとだいたい一致した。